（資料）

第 17 回舟橋聖一文学賞

第 35 回舟橋聖一顕彰青年文学賞

第１７回舟橋聖一文学賞
授賞者

作　品　名	口訳（こうやく）　古事記（こじき）	出 版 社 名	講談社
著　　者	町田（まちだ）　康（こう）		

第３５回舟橋聖一顕彰青年文学賞
入賞者

優　秀　作　品

作　品　名	バニラ、ストロベリー、それからチョコレート	作 品 部 門	小　　説
作　　者	吉田（よしだ）　詩織（しおり）	年　　齢	29歳
住　　所	宮城県		

第１７回舟橋聖一文学賞

町田　康

『口訳　古事記』授賞者コメント

今を生きる私たちが昔と連続していることを確かめたくて古事記を現代の言葉に書き換えた拙著がかかる栄誉を受けたことを嬉しく思います。その思いが一入なのは、その賞が天照大御神が誓約を行った際生れた活津日子根命に縁がある彦根市より授けられる賞であること、そして十代半ば頃に読んで自分の言語感覚に幾許かの影響を及ぼしているに違いない舟橋聖一の名を冠した賞であるからです。彦根市の皆様に感謝申しあげます。

町田（まちだ）　康（こう）　氏　プロフィール

作家。1962年大阪府生まれ。1997年『くっすん大黒』でBunkamuraドゥマゴ文学賞、野間文芸新人賞、2000年「きれぎれ」で芥川賞、2001年『土間の四十八滝』で萩原朔太郎賞、2002年「権現の踊り子」で川端康成文学賞、2005年『告白』で谷崎潤一郎賞、2008年『宿屋めぐり』で野間文芸賞を受賞。他の著書に「猫にかまけて」シリーズ、「スピンク日記」シリーズ、『ホサナ』『記憶の盆踊り』『湖畔の愛』『ギケイキ』『男の愛　たびだちの詩』『しらふで生きる　大酒のみの決断』『私の文学史　なぜ俺はこんな人間になったのか？』『口訳 古事記』など多数。

『口訳　古事記』あらすじ

日本最古の神話「古事記」を、関西弁をまじえた今の話し言葉で現代語訳。天地開闢からイザナキとイザナミによる「国生み」と黄泉国行、天照大御神の「天の岩屋」ひきこもりと追放された乱暴者・須佐之男命のヤマタノオロチ退治、何度も殺されては甦った大国主神の国作り、天孫降臨をめぐる攻防、父の天皇に疎まれた日本武尊による熊曽・出雲征服と非業の死、応神天皇、仁徳天皇の治世まで。アナーキーな神々と英雄たちが繰り広げる奔放なる愛と冒険、裏切りと謀略にみちた日本最古のドラマを、破天荒な超絶文体で現代に降臨させた作品。

『口訳　古事記』　［ 選評 ］　　選考委員　　藤沢　周

世界の始まりから神々の誕生、皇位継承について綴った日本現存最古の書物『古事記』。天武天皇が勅撰的史書と詔した、いわば正史であるが、まったく対極の稗史、野史として爆発的な虚構のエネルギーを注入したのが、町田康『口訳　古事記』である。乱痴気ともいえる神々のさまを描く筆致は、凡百の古典現代語訳を超えて、フィクションとは何か、想像とは何かを問いかけもする。「古事記」であるとともに、文学の「今事記」の誕生である。

第３５回舟橋聖一顕彰青年文学賞

優秀作品

作品名　小説　『バニラ、ストロベリー、それからチョコレート』
作者　　吉田　詩織

受賞してのコメント

誰かや何かを思う気持ちが尊重される対等な人間関係を書こうと思っていました。母校がキリスト教かつ別学の学校だったため、宗教色ものある女子校というのを描く点で参考にしました。

わたし自身、属するコミュニティにおいて、多数であることや少数であることというのはその人自身の優劣とはまったく関係ない、ということを考えさせられる機会が多かったこともあり、それについて自分なりの考えや感情を書きたいとずっと考えていました。わたしにとっての執筆のテーマなのかもしれないと改めて感じました。

また、人が人と出会って些細な気持ちの変化がおとずれる物語が好きで、起承転結がはっきりとした大きなうねりのある物語と言うより、A→B→A‘のように進行する、他者から見れば大きな変化はなくとも、本人たちにとって何かが確かに変わっている、というような小説を書き続けたいです。

かつて自分が心のよりどころにした本の数々のように、誰かがふとしたときに思い出してくれるような物語をつくっていけるよう、よりいっそう努力したいと思います。

略歴

1994 年（平成 6 年）生まれ、宮城県出身。
宮城学院女子大学学芸学部日本文学科卒業。
2019 年 6 月分、2022 年 7 月分山新文学賞佳作、集英社 Cobalt 短編小説新人賞 202 回受賞、2019 年度集英社 Cobalt 短編小説新人賞最優秀賞受賞。

あらすじ

親の離婚を機に転校した高校一年生の明里は、放課後の講習で長沢という少年じみた女子と話をするようになる。親しくなるにつれて秘密や悩みを打ち明けあっていくふたりはそれでもおたがいを大切にしたいと思う。

第３５回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」　選考講評

選考委員　藤沢　周

「小説」の妙

わずかなズレ。わずかな違和感。それが些末であればあるほど、隙間や亀裂の深みが心の奥に達して疼き、呻く。友人の「あ、ガイブセーコーシュー？」という何気ない声かけが、無意識裡にも若い女の子の足元を不安定にさせることもあるのだ。

「バニラ、ストロベリー、それからチョコレート」は、エスカレーター式のミッション系の私立高校に入学した「わたし」が主人公。元々提携校からの入学であるから勝手知ったるはずではあるが、「外部生講習」なる特別枠の授業を受けなければならない。その小さなギャップが半径一メートル未満の日常を、遠景にも、あるいは微視的にもする。同じ外部生の友人との関係や教室の風景、夏の眩しい日差し、目を細めた時の二重瞼テープの攣れ……。繊細な感覚のもとに、かすかな息遣いさえ捉える観察が、美しく、おかしく、爽やかに主人公たちの日常に光をあてた。小さな違和に深淵が兆していることさえをも捉えた本作品を、選考委員全員一致で受賞作に推した。

今回の「舟橋聖一顕彰青年文学賞」最終候補作には、この受賞作と競るほどの力作がいくつか見られ、若い書き手たちの創作レベルの高さに唸らされたが、たとえば、「モルモットになる」。不妊治療を受ける三〇代半ばの夫婦に、じわじわと訪れる狂気への傾斜を見事なグラデーションで描いた作品である。増え続けるペットのモルモットの蠢きや野菜の咀嚼音が、人間の分からなさを責め立てるかのよう。カフカの「変身」を想起させもするが、けっして不条理ではない。不条理ではないから、読む者にも切なく響いてくるのだ。

また、オシロイバナの香りから、記憶を巡る繊細な物語に仕立てた「夏の、あの日の香り」も読ませた。亡き祖母、母、父、三〇歳になる主人公の女性。香りから記憶の遠近法が開かれ、白昼夢にも似た柔らかな感触を持たせながらも、いつ崩れるか分からない家族の在りようを描いた。生きることの切なさ、悲しさ、慈しみが心に残る。

両作ともに受賞に値するレベルではあったが、物語を創る、プロットを動かすという手つき、作意が少し覗いたのが残念。だが、これら三作に共通する妙は、日常に当たり前に散見される事柄から、些末であるからこそ実存に響いてくるような違和感を発見したところにあるだろう。じつはこれこそが難しい。「大説」でも「中説」でもない。カーテンの揺らめきや、モルモットの小さな鳴き声、アパートの窓に届いた花の香りを描く「小説」だからこそ、人間世界の最も深い謎に迫れるのだ。

第１７回　舟橋聖一文学賞

町田（まちだ）　康（こう）　さん

第３５回　舟橋聖一顕彰青年文学賞

優秀作品　吉田（よしだ）　詩織（しおり）　さん

舟橋聖一顕彰青年文学賞

過去の応募件数

年　度	青年文学賞	
	回数	満18歳～満30歳の青年
平成元	1	100
平成2	2	40
平成3	3	159
平成4	4	113
平成5	5	70
平成6	6	93
平成7	7	155
平成8	8	178
平成9	9	133
平成10	10	152
平成11	11	146
平成12	12	111
平成13	13	111
平成14	14	73
平成15	15	100
平成16	16	92
平成17	17	111
平成18	18	68
平成19	19	58
平成20	20	68
平成21	21	96
平成22	22	66
平成23	23	75
平成24	24	75
平成25	25	61
平成26	26	61
平成27	27	58
平成28	28	65
平成29	29	39
平成30	30	53
令和元年	31	25
令和2年	32	39
令和3年	33	40
令和4年	34	33
令和5年	35	45

都道府県別応募件数

都道府県	応募件数（延べ）
北海道	
青森	
岩手	
宮城	2
秋田	
山形	
福島	
茨城	
栃木	
群馬	1
埼玉	2
千葉	1
東京	9
神奈川	5
新潟	1
富山	1
石川	
福井	1
山梨	
長野	
岐阜	
静岡	
愛知	1
三重	1
滋賀	(3)　6
京都	2
大阪	1
兵庫	1
奈良	
和歌山	
鳥取	
島根	
岡山	
広島	2
山口	
徳島	1
香川	
愛媛	
高知	1
福岡	3
佐賀	1
長崎	
熊本	
大分	
宮崎	
鹿児島	
沖縄	2
その他	
計	45

（　）内　彦根市再掲
21都道府県から応募

※令和2年度から応募要件を変更し、満18歳～満30歳の年齢制限を満13歳～満30歳に引き下げています。なお、今回の応募最年少は15歳でした。

舟橋聖一文学賞規程

（趣旨）

第１条　彦根市民が豊かな心を育み、彦根市に香り高い文化を築くため、舟橋聖一文学賞を制定し、彦根市名誉市民である舟橋聖一文学の世界に通ずる文芸作品に対し、賞を授与するものとする。

（授与）

第２条　舟橋聖一文学賞の授与は、年１回とする。

（対象）

第３条　舟橋聖一文学賞の対象となる作品は、次の各号に掲げる要件を備える作品とする。

(1)　作品の種別が小説であること。

(2)　毎年６月１日を基準日とし、概ね同日前１年に刊行された単行本であること。

（選考委員会等）

第４条　前条に規定する表彰候補作品を選考するため、舟橋聖一文学賞選考委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会は、市長が委嘱する委員で構成する。ただし、舟橋聖一顕彰青年文学賞の選考委員との兼務は妨げない。

３　前項に規定する委員は４人以内とし、その任期は４年とする。ただし、再任は妨げない。

４　特に市長が必要と認めた場合は、顧問を置くことができる。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置く。

２　委員長は、委員会の委員の互選により定める。

３　委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

４　委員長に事故があるときまたは委員長が欠けたときは、委員長をあらかじめ指名した委員がその職務を代理する。

（会議）

第６条　委員会の会議は、必要に応じて委員長が招集し、委員長がその議長となる。

２　委員会の会議は、委員の半数以上が出席しなければ開くことができない。

３　会議の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

（授賞）

第７条　授賞作品は、委員会の意見に基づき、市長が決定する。

２　授賞作品は１作品とする。ただし、授賞作品がないときは、この限りでない。

３　賞は正賞および副賞とし、副賞は賞金とする。

（補足）

第８条　この規程に定めるもののほか必要な事項は、市長が定める。

付　　則

この規程は、平成１９年７月２０日から施行する。

付　　則

この規程は、平成２４年４月　１日から施行する。

付　　則

この規程は、平成２４年９月２３日から施行する。

第35回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」作品募集要綱

趣　旨

作家・故舟橋聖一氏は、井伊直弼公を題材にした小説『花の生涯』を執筆し、それが後に映画や演劇となり、また第1回のＮＨＫ大河ドラマとして放映されたことで、直弼公と彦根市の名が全国に知られるようになりました。そのため、本市では、このような多大なる功績をたたえ、同氏を彦根市名誉市民第1号にするとともに、広く青少年の文学奨励をはじめ、教育・文学の振興を図るため、同氏を顕彰する文学賞として、平成元年度から文学の登竜門となる「青年文学賞」を設けました。

今年度も下記のとおり全国の青年各位から優れた作品を公募します。

記

1　設 置 者　　彦根市

2　選考委員　　佐藤　洋二郎（作家）
藤沢　周　　（作家）
増田　みず子（作家）
富岡　幸一郎（文芸評論家）

3　応募要領

(1) 応募作品　　小説・随筆・戯曲・評論
※同一作品部門の応募は、1人1編に限る。

(2) 応募規定　　400字詰め原稿用紙50枚以内（随筆については、10枚以内でも可）で縦書きとする。
（ワープロ原稿の場合は、A4サイズ横･1行40字×25行で縦に印字し、400字詰め換算枚数を明記する。）自作未発表の作品に限る。
※応募作品には、指定の応募票を記入および添付すること。

(3) 応募資格　　令和5年9月1日現在、満13歳以上満30歳以下
（平成4年9月2日から平成22年9月1日までに生まれた人）
ただし、今まで入賞した作品部門での応募はできない（佳作を除く）。

(4) 応募期間　　令和5年6月1日（木）～9月1日（金）（郵送の場合は、当日消印有効）

(5) 提出先　　〒522-0001　滋賀県彦根市尾末町8番1号
彦根市立図書館内「舟橋聖一記念文庫」事務局
電話　0749-22-0649

(6) 提出方法　　郵送または持参（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）

(7) その他　　※応募作品は、一切返却しない。
※入賞作品の著作権は、彦根市に帰属する。
※最終選考に残った作品は、受賞録に作品名、氏名等を記載することがある。

4　賞　　優秀作品には、「舟橋聖一顕彰青年文学賞」を授与する。
正　賞　　賞状および舟橋聖一色紙
副　賞　　金　30万円
※なお、佳作はなしとする。

5　発表期日　　令和5年11月～12月予定（報道関係に発表する。）

6　授 賞 式　　令和5年12月予定

令和５年度「舟橋聖一文学賞」「舟橋聖一顕彰青年文学賞」選考委員プロフィール

佐藤（さとう）　洋二郎（ようじろう）（作家）

昭和２４年６月　福岡県生れ 元日本大学教授

平成　７年　　「夏至祭」で**第１７回野間文芸新人賞**を受賞。

平成１１年　　「岬の蛍」で**芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成１３年　　［イギリス山］で**木山捷平文学賞**を受賞。

主な著書　　「福猫小判夏まつり」「夏の響き」「未完成の友情」「お母さんブタのダンス」「坂物語」「グッバイマイラブ」「TOKYO－BRIDGE 東京ブリッジ」「親鸞　既往は咎めず」「妻籠め」「Y 字橋」「未練」「百歳の陽気なおばあちゃんが人生でつかんだ言葉」「偽りだらけ歴史の闇 歴史の真実とは何か」など多数。

藤沢（ふじさわ）　周（しゅう）（作家）

昭和３４年１月　新潟県生れ　元法政大学教授

昭和５９年～平成８年　　書評紙「図書新聞」の編集者を務めた。

平成　５年　　「ゾーンを左に曲がれ」で作家デビュー。

平成　７年　　「外回り」第１１３回芥川賞候補。

平成　９年　　「サイゴン・ピックアップ」第１１７回芥川賞候補。

平成１０年　　「砂と光」第１１８回芥川賞候補。

平成１０年　　「ブエノスアイレス午前零時」で**第１１９回芥川賞**を受賞。

「死亡遊戯」「SATORI」「ソロ」「サイゴン・ピックアップ」野間文芸新人賞候補。

主な著書　　「紫の領分」「焦痕」「箱崎ジャンクション」「第二列の男」「雪闇」「心中抄」「キルリアン」「波羅蜜」「武曲」「武蔵無常」「サラバンド・サラバンダ」「世阿弥最後の花」等

増田（ますだ）　みず子（こ）（作家）

昭和２３年１１月　東京都生れ

昭和５４年　　「ふたつの春」「慰霊祭まで」で芥川賞候補。

昭和６０年　　「自由時間」で**野間文芸新人賞**を受賞。

昭和６１年　　「シングル・セル」で**泉鏡花文学賞**を受賞。

平成　３年　　「夢虫（ゆめんむし）」で**芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成１３年　　「月夜見」で**伊藤整文学賞**を受賞。

主な著書　　「道化の季節」「麦笛」「自殺志願」「内気な夜景」「火夜」等

富岡（とみおか）　幸一郎（こういちろう）　（文芸評論家）

昭和３２年１１月　東京都生れ　　関東学院大学教授

昭和５４年　　「意識の暗室　埴谷雄高と三島由紀夫」で、第２２回**『群像』新人文学賞評論優秀作**を受賞。

平成　元年　　「内村鑑三」で第２回三島由紀夫賞候補。

平成２４年４月　鎌倉文学館館長に就任。

主な著書　　「戦後文学のアルケオロジー」「仮面の神学　三島由紀夫」「使徒的人間　カール・バルト」「川端康成　魔界の文学」「平成椿説文学論」「入門　三島由紀夫」「古井由吉論　文学の衝撃力」「危機の時代の宗教論 ヒューマニズム批判のために」「石原慎太郎の時の時 「戦後」への最後の反逆者」など多数。

「作家・舟橋聖一」のプロフィール

舟橋聖一は、明治３７年１２月２５日、東京市本所区横網町に生まれたが、幼少時代から病弱のため学校を欠席がちであった。７歳の時、祖母に連れられて初めて「市村座」の舞台を観劇し、８歳頃から少年雑誌・新聞小説に親しみ、９歳から１１歳にかけて二葉亭四迷の「平凡」、国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」、岩野泡鳴の「耽溺」、田山花袋の「蒲団」、泉鏡花の「高野聖」等を愛読した。この時代の読書で身につけた教養が、その後の芝居と相撲に一生の情熱を注ぐ環境を作り上げたものと思われる。

大正１１年（１７歳）、水戸高校に入学するや、同人雑誌「歩行者」の同人となり、戯曲「支配する力」など数篇を発表した。また、菊地小劇場の東屋三郎の紹介で、小山内薫の門下に入った。

大正１４年（２１歳）、東京帝国大学に入学。池谷信三郎・村山知義・河原崎長十郎等と新劇団「心座」を結成。また、学内の文芸雑誌、「朱門」を阿部知二・池谷らと創刊し、初小説「信吉の幻覚」を発表した。翌年「朱門」に発表した戯曲「痼疾者」が、直ちに５月、新橋演舞場で、「心座」によって上演され、上司小剣、秋田雨雀に認められた。９月には、戯曲「白い腕」を菊地小劇場で「心座」によって上演された。１０月には、この作品を今東光推薦で〈新潮新人号〉に発表して、初めてまとまった原稿料を得た。また、「心座」では今日出海と知り合う。

昭和３年（２４歳）、新人作家１９名による「新人クラブ」結成に参加。その機関紙「文芸都市」の同人となり、同人の井伏鱒二、外村繁らと親交を結び、戯曲「襤褸」を発表。３月、東京帝国大学卒業。卒論は、「岩野泡鳴の小説及び小説論」。卒業後、明治大学予科講師となる。「文芸都市」に評論「演劇時評」を毎回連載（～昭和４年８月）。文芸家協会会員になる。

昭和４年（２５歳）、「心座」退会。劇作家から小説家へ転向する。

昭和５年（２６歳）２月、畏友・今日出海らと劇団「蝙蝠座」を４月に、小林秀雄、吉行エイスケ、井伏鱒二、今日出海らと「新興芸術派倶楽部」を結成する。６月、〈新潮〉に戯曲「バンガロウの秘密」発表。戯曲集「愛慾の一匙」を処女出版した。１０月、〈文学時代〉に「海のほくろ」を発表し、川端康成の賞賛を受ける。

昭和７年（２８歳）、「あらくれ会」の同人となり、徳田秋声門下になる。上越線車中で傾倒していた谷崎潤一郎に出会う。

昭和８年（２９歳）、「行動」創刊。中心的役割を果たす。翌年１０月、「行動」に「ダイヴィング」を発表し、行動主義の宣言をして文壇の注目を引いた。おりから、フランスの新文学に現れた知識人の政治的参加の行動性が話題になる時勢だったので、舟橋氏の能動性が時代のオピニオンリーダーの役割を果たすことになった。この時培われた精神力が、戦後日本文芸家協会の再建に、言論統制に、税金問題に、自分の信念を押し通す実行性と合理主義を兼ね備えることになった。

昭和１０年（３１歳）、「行動」が終刊、舟橋氏の行動主義への緊張がスランプに陥ることになったが、短編小説「木石」、評伝「岩野泡鳴伝」が、再び舟橋文学の面目を確保せしめた。戦争中は、時世にもろともせず、昭和１６年（３７歳）から執筆し、終戦間際に完成した「悉皆屋康吉」は代表的傑作である。

戦後は、執筆に対する制約がなくなると、「裾野」、「雪夫人絵図」、「花の素顔」、「芸者小夏」など愛欲小説が次々に発表され、名実ともに舟橋文学が確立された。

昭和２６年（４７歳）、日本古典文学の代表作「源氏物語」を平易に現代語で戯曲化した。戦後の歌舞伎に新作の流行を生み、演劇史上画期的な作品である。また、現代語による古典物を普及させるなどその意義は大きい。国文学趣向を取り入れた「ある女の遠景」は異色のもので、昭和３８年（５９歳）に「毎日芸術賞」を受賞している。歴史小説では、「白い魔魚」・「夏子もの」に次いでベストセラーとなった「花の生涯」や自伝小説「真贋の記」・「文芸的グリンプス」がある。

昭和３９年（６０歳）に、彦根市名誉市民第１号。昭和４２年（６３歳）には、「好きな女の胸飾り」で「野間文芸賞」を受賞。同年に芸術院会員となり、昭和５０年（７１歳）に文化功労者に選任されるなど、その功績は枚挙に遑がない。

昭和５１年（７２歳）死去。（１月１３日）

明治大学文学部教授。文芸家協会初代理事長。日本相撲協会横綱審議委員会委員長。運輸省交通委員。文部省国語審議会委員。中央競馬会名誉顧問。日本近代文学館創立常務理事など。